

令和 5 年度（2023年度）新規研究課題

課題番号：R5-07

課題名：資源循環型農業による大豆の生産コスト低減と地鶏への多給技術の確立

研究期間：令和 5 年～令和 7 年（2023年～2025年）

研究担当：畜産技術部 家畜改良研究室
本部 経営高度化研究室
農業技術部 土地利用作物研究室

1 研究の背景

山口県は畜産業算出額に占める養鶏の割合が高く、鶏ふんの処理が課題となっている。

さらに、水田営農を中心とする経営体が多い山口県では、水田転換畑で栽培され、経営を支える重要な品目である大豆を低コストで生産するため、発酵鶏ふんの利用が期待されるが、その施用技術が確立されておらず、利用が円滑に進んでいない。

また、わが国の家畜飼料原料の多くは輸入に依存しているが、近年の輸入飼料価格高騰により、飼料自給率の向上並びに飼料価格の低減が必要である。

そこで、地鶏飼養における飼料自給率の向上と低コスト化のため、既に活用されている飼料用米に加えて、自給タンパク質飼料として地域での大豆生産に鶏ふんを活用し、生産された大豆を飼料原料として活用することが考えられる。

2 目的

発酵鶏ふん利用による低コストでの大豆栽培技術を確立し、そこで得られた大豆を輸入飼料に換えて地鶏飼料として活用することにより、地鶏生産における飼料自給率向上と低コスト化および地域内での循環型農業に寄与する。

3 研究内容

- ・肉用鶏への大豆の多給技術の確立
- ・大豆栽培における発酵鶏ふんの適切な施用時期および施用量の解明
- ・生産者圃場において利用可能な発酵鶏ふんの施用方法の検討

4 研究のポイント

- ・輸入飼料原料価格の高騰が続く中、自給可能な飼料原料の選択肢が増えることにより、飼料の低コスト供給が可能となる。
- ・地域の鶏ふんを活用した大豆の低コスト生産が可能となることにより、生産農家の収益向上及び鶏糞処理の負担軽減ができる。

資源循環型農業による大豆の生産コスト低減 と地鶏への多給技術の確立

研究期間：R5-R7（2023-2025）

研究担当：畜産技術部 家畜改良研究室

本部 経営高度化研究室

農業技術部 土地利用作物研究室

研究の背景

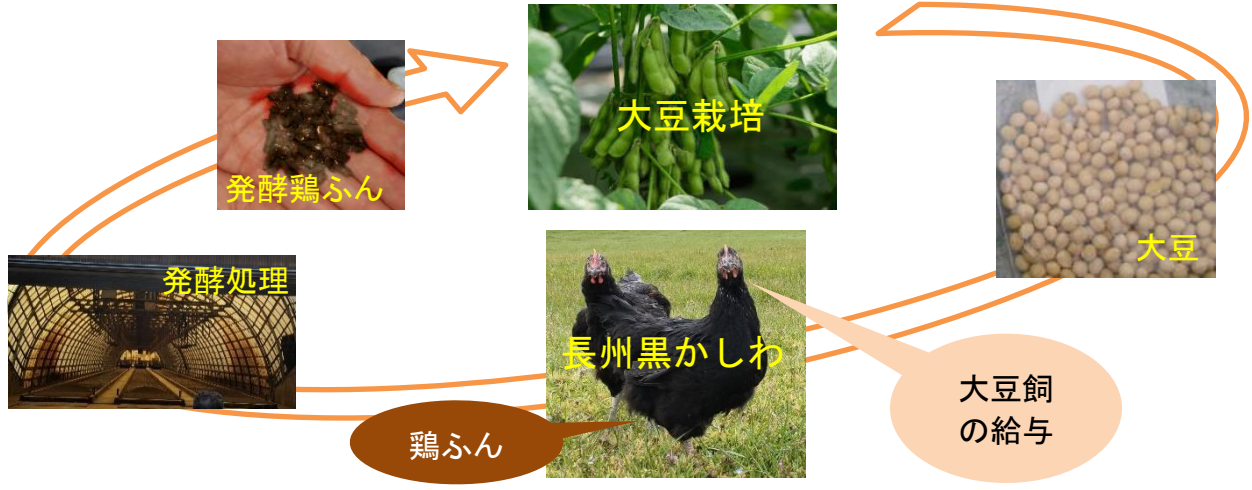
- 養鶏産業の維持・発展のためには、鶏ふんの処理が課題。輸入飼料高による経営圧迫。大豆は貴重なタンパク源。
- 水田営農を中心とする経営体において、低コスト生産に向けた発酵鶏ふんの利用が滞っている。

問題点

- 大豆を活用した地鶏生産技術が確立されていない。
- 大豆栽培における、鶏ふん施用技術が確立されていない。

研究内容

- 肉用鶏への大豆の多給技術の確立
- 大豆栽培における発酵鶏ふんの適切な施用時期および施用量の解明
- 生産者圃場において利用可能な発酵鶏ふんの施用方法の検討



期待される成果

- 輸入飼料原料価格の高騰が続く中、自給可能な飼料原料の選択肢が増えることにより、飼料の低コスト供給が可能となる。
- 地域の鶏ふんを活用した大豆の低コスト生産が可能となることにより、生産農家の収益向上及び鶏ふん処理の負担軽減ができる。